



# 美<sup>ちく</sup>畜<sup>び</sup>退魔師

痴獄の学園

小説 上田ながの 挿絵 雪月竹馬

立ち読み版

終	其の七	其の六	其の五	其の四	其の三	其の二	其の一	序
永遠	門出	淫獄	黒幕	輪姦	自己犠牲	破瓜	学園	退魔捜査官

## 登場人物紹介

Characters



かぶらぎ はづき  
**鍋木 葉月**

若くして千年に一人の逸材とも呼ばれるほどの実力を持つ退魔師で、国家退魔師の資格も持つ。日夜妖魔などが関わる事件の為に奔走する。

かさぎ しょうこ  
**笠城 祥子**

葉月が潜入するクラスの同級生。生徒会長でもある。

むつき こうた  
**陸月 浩太**

不良たちに絡まれているところを葉月に助けられる。

みずしろ かずま  
**水城 一馬**

学校の保健医。保健室登校が多い浩太とは顔見知り。

恥ずかしすぎて否定してしまう。すると浩太は一度愛撫を止め、濡れた指を葉月へと見せつけてきた。

「これでも濡れてないの？」

「う……あ……」

ヌラヌラと彼の指は妖しく輝いている。これを見せつけられて否定などできない。

「これだけ濡れてればもう挿入れてもいいよね」

ごそごそとズボンのチャックを開け、ペニスを取り出す。

「あ……はあはあはあ……」

視界に映る性器に、自然と息が荒くなつていった。

肉先が膣口に擦りつけられる。そして――

ずちゅう。

「は、挿入ってきた……あっ……熱い……」

膣中へと挿入してきた。初めての時とは違い、濡れている為かすんなりと肉棒は蜜壺へと沈み込んでくる。膣中に広がる異物感。まだ迎え入れるのは二度目だ。

（な、なんだこれ？ お、一昨日とはな、何かが違う――）

だというのに何故か心地よさを感じてしまう。セックスであるのは初めての時とは変わらないのに、下腹部がじんわりと温かくなつていくのを感じた。

「凄い。絡みついてくるよ籀木さん。う、動く……動くね！」

「え？　だ、駄目……い、今動いちゃ……あんんん」

ズチュツとペニスが動く。途端に痺れるような刺激が走った。痛みではない。心地よさを伴った甘い刺激だ。

「可愛い声です。も、もしかして感じてますか？」

「か、感じる？　そ、そんなこと……ない……」

恥ずかしくて否定するが、これを聞くと浩太はニヤリツと笑い――  
「そ、そうですか……それじゃあ、感じたって言わせてあげます」

より奥へと肉棒を突き込んだ。

じゅぽっじゅぽっじゅぽっじゅぽっじゅぽっ！

「くひっ！　お、奥っ！　奥は駄目。んあっあっあっ！　んじゅっ……ちゅっちゅっちゅんんん。んちゅうう」

ただ突いてくるだけではない。結合しながら浩太は口付けまでしてきた。唇と唇が重なりあう。差し込まれる舌。グチュグチュと口腔を掻き回された。破瓜の時、アナルセックスの時とは違う優しい性交。口付けするとそれだけで何故だか心が安らぐ気がする。

ちゅくちゅく、くちゅるっ……ちゅっちゅっちゅっちゅっ……。

「んふーんふーんふーんふー……あ、お、大きくなってる。で、射精るの？　な、腔なか中は、腔中は駄目。お願い腔中は!!」

ペニスの膨張を感じた。射精が近いことが分かる。初めての時のようにまた腔中に射精

されてしまうかも知れない。そう考えると恐ろしく、必死に膣中射精だけはやめてくれと懇願してしまう。

「そう？　じ、じゃあ口で飲んでくれますか？」

(……はあはあ……の、飲む?)

あり得ないような提案だった。けれどそれをしなければ膣中に射精されてしまう。それだけは絶対に避けたかった。選択肢などない。

「わ、分かった。飲む。飲むから……あつあつあつあああ」

じゅばんっじゅばんっじゅばんっじゅばんっ！

嬌声を上げながら何度も頷く。

「よし、そ、それじゃあ飲んで！」

ズボットペニスを引き抜いてくる。と同時に葉月の身体を押さえつけるようにして無理矢理しゃがみ込ませてくる。

「——ひっ」

目の前に突き付けられる肉棒に、反射的に悲鳴のような声を漏らしてしまった。そのまま突き出される腰。

「おぼっ!!」

口唇が肉棒によって開かれてしまう。伝わってくる熱気によって唇が熱い。喉奥までペニスを突き入れられ、苦しさに瞳を見開いてしまう。

「ああっ！ いいよっ!!」

勿論口腔挿入だけでは終わらない。浩太はうっとり瞳を細めると、膣を犯していた時のような激しさで腰を振り始めた。

ずじゅごっずじゅごっずじゅごっ!

「ぼっ！ んぼっ!! おっおっおっおぼお」

玩具のように頭を揺さぶられる。喉奥を突かれるたびに息が詰まり、涙さえ浮かんだ。

「うあっ！ も、もう射精るっ!!」

僅か数度の突き込みだったが、これによって浩太は絶頂まで上り詰める。

びゅぶぼっ！ どびゆるるるるるっ!

「んひっ！ んもおおおっ!」

口腔内にビュッビュッと白濁液が撃ち放たれた。液体というよりもゼリーといった方が正しいのではないかと思うくらいに濃厚な牡汁が、口腔いっぱいには広がっていく。

「おぼっ！ うええええ……」

菌の一本一本にまで濃厚汁が染みつく。塞がれる喉、息が詰まった。すぐにでも吐き出してしまいたい。だが、浩太は肉棒を口腔から引き抜いてはくれなかった。後頭部を押さえられ、喉奥まで肉棒を咥えさせられながら、ピクンピクンッと葉月は何度も身体を痙攣させた。

「ああ、こ、これを飲んで!」

指示が飛ぶ。

(の、のぶ？ こ、こへを……？)

口腔内に溜めているだけで、味覚が痺れそうなほどの苦みを覚える。こんなものを飲み干せる気がしない。

(れ、れも……やるしはなひ……)

牡汁によって熱に浮かされたような状態になりながら、自分自身に言い聞かせ、ゴクリッと喉を鳴らした。

「んぶえっ！ おぶっ、うぶええっ！」

やはり白濁液は濃厚すぎる。すぐに喉に引っかかり、肉棒を咥えたまま何度も咳き込むことになってしまった。この為、精液は逆流して鼻にまで流れ込み、たらりつと鼻水のように垂れ流れた。口端からもだらだらと流れ落ちる。

「飲めますよね？ だって僕達は恋人同士なんですから……。飲めますよね？」

けれど容赦はしてくれない。この状況に浩太は酔っているようだった。

「ら、らいじょーぶら……」

一度決めたことはやり抜かねばならない。問いかけに対して苦しげではあるが答え――

「うぶえっ……んごきゅっ、ごきゅっごきゅっごきゅっごきゅっ……んふああああ……」

再び喉奥に何度も咳き込みつつ、白濁液を流し込んだ。胸元が白濁液の熱気で熱くなっていく。身体の中に精液が広がっていくのはつきりと感じた。

「ぷはあ……の、のんらろ……」

やがてすべて飲み干した葉月から肉棒が引き抜かれる。退魔師は上目遣いで浩太を見つめながら、んあつと口を開いて口腔に精液が残っていないことをアピールした。

\*

「んくっ！ こ、声……声が出ちゃう……あつあつあつ……そ、そんなに激しく動かないでっ！ あつあつあつ」

屋上での件で浩太のタガは外れてしまったらしい。一度射精したにもかかわらず、満足してくれなかった。彼は屋上での行為を終えると教室に戻ることなく、すぐに葉月を男子トイレの一角に連れ込んだ。こちらを便器の上に跨がらせ、背後から挿入。そのまま何度も膣中を突いてきた。

「は、はげっし、はげしすぎっる！ ふぐっ……ふーふーふーふー」

男子トイレ内にはいつ他の生徒が来てもおかしくない。その為どうしても声を抑えなければならなかった。必死に自分の制服を咥え嬌声を抑えようとする。けれどその努力を嘲笑うかのように、より激しく腰を振ってきた。

ギシッギシッギシッギシッ！

便器が軋む。

「ひっひっひっひんんん」

突かれるたびに嬌声が漏れ出てしまう。

「射精すよ！ たっぷりかけてあげる」

言葉と共に引き抜かれる肉棒。

ぶびゅばっ！ どびゅっどびゅっどびゅっどびゅるるっ！

「ひあっ！ 熱い！ 熱いのがかかるっ!!」

引き抜かれた肉棒が痙攣し、白い葉月の尻に何度も精液を噴きかけてきた。

\*

「舐めて……僕のを舐めて……」

何度射精しても浩太のペニスは衰えなかった。便器に座った彼の肉棒が快楽を今か今かと待ちわびて震える。

「こ、どうか？ んちゅっ……ちゅぶるる……」

ペニスはピストンすることで射精する。つまり何らかの摩擦を与えれば絶頂に導けるのだろう。覚え込まされてしまった性知識を活かし、葉月は僅かに躊躇いつつも、肉棒を咥えた。舌を肉茎に這わせながら、ジュポジュポと顔を前後に振る。

「んぐっ、んじゅぶっ……ふちゅ、ちゅずるる……んぽっんぽっんぽっ！」

顔を前後に振るたびに唾液が溢れた。顎が唾液に塗れ無様に穢れる。

（苦い。不味い……う、なんだ……これな、なにか、か、皮が剥けて……）

しばらく口奉仕を続けていると、肉棒を包んでいた包皮がずるりと剥けていった。思わず口を離してそれを見る。





「ご……うえええ……ごめん……」

顎から床に精液の糸を伸ばしながら、葉月は謝罪する。

\*

「ねえ、キスしてよ」

放課後の帰り道も葉月は浩太と一緒にだった。二人で腕を組み、帰路につく。当然下校方向が同じ生徒達の姿もあった。彼らから好奇の瞳が向けられる。

「あの二人が恋人同士？」

「嘘でしょ……趣味悪すぎなんじゃない」

ひそひそ話が耳に届く。羞恥のあまり葉月の顔は真っ赤に染まったままだった。これに浩太はまるで気付いていない。葉月以外のものは何も視界に入っていないようだった。

んちゅっ、ちゅぶ、くちゅるるう……

「んふ、ふううう……」

（こんなところで……誤解される。みんなに誤解されちゃう……）

道の途中で本物の恋人同士のような濃厚すぎる口付けを交わす。互いに唾液を交換しあい、舌と舌を絡ませあった。相変わらず息は臭い。

「ねえ、我慢できなくなっちゃった」

そしてこのキスで再び浩太は発情する。

そのまま葉月は路地裏に連れ込まれた。浩太は退魔師の背後に立つと、スカートを捲り

上げ、膣が剥き出しになる程度にショーツを下ろしてきた。そのまま肉棒を膣口に擦りつけ、グジュリッと挿入してくる。

「く、んんんんん」

(こ、こんなところで……)

端から見れば仲のいい恋人同士が仲良く並んで立っているような凶にも見えないことはない体勢での挿入だった。しかし、見るものが見ればすぐに気付かれてしまうだろう。

「はあっはあっはあっはあ」

荒い息を吐きながら、何度も何度も腰を叩き付けてくる。

「だめっだ。こ、こんなところで……あっあっあっあっ……」

駄目だと言いつつ、甘い声を抑えられない。今日一日で何度も繋がりあつた為か、肉体は性感に過敏になっていた。

(声を抑えないといけないのに……駄目だ。熱い。身体が熱い……)

身体の奥底から今まで感じたこともない感覚が増幅してくる。気がつけば自ら腰を浩太へと押しつけてしまつてさえた。

じゅぽっじゅぽっじゅぽっじゅぽっ！

立ちバックの体勢で二人は腰をぶつけあう。

「んふーんふーんふー……あっ、あっあっあっ！」

突き上げるようなピストン。ズンズンッと膣奥をノックしてくる。このような場所で声



を上げてはいけないと、必死に唇を引き結んでいたのだが、数度の突き上げであっさりと嬌声が漏れ出てしまった。

「んひっ、こ、こんなところで、そ、そんなには、激しくしたら——ひっひっひんん」

必死に止めようとするが、やはり聞き入れてはもらえない。それどころかこちらの声により興奮をかき立てられたように、より激しく腰を振り始めてきた。

「——あひっ！ ひっひっひんんん」

電流のように快楽が全身を駆け巡っていく。

（ああ、来る。なにか来る！）

ペニスで膣中を蹂躪されるたび、思考が蕩けそうになった。湧き上がってくる感覚に、溺れてしまいそうになる。

じゅぽっじゅぽっじゅぽっじゅぽっ！

（くるっ！ くるくるくるくるっ!!）

他のことなど何も考えられない。この感覚に溺れてしまいたかった。

「ああ、で、射精る！」

「——え？」

が、膨れあがるものの正体がなんなのかを知る前に、浩太が限界を告げた。ペニスもびくびくと震え——

ぶびゅばっ！ どびゆるるるっ！



心が定まる。最後に勝つ為ならば一時の恥など耐え抜けると思えた。ここで肉棒を挿入しても、自分を維持できる自信も生まれてくる。葉月は不敵に笑った。

『なるほど……。では楽しませてもらうとしよう』

声が笑う。

(余裕ぶっていられるのも今のうちだけだ……)

覚悟を決めた。ゆっくりと腰を下ろしていく。

じゅずつ、ぐじゅるるるう……。

「んふっ！ んあああ……は、挿入ってきた……あっあっあっ……」

下腹部を肉棒によって拡張される。腔中に熱気が広がってきた。

「ふぐつ、あ、熱いっ……そ、それに、お、奥に当たる……」

浩太の男根では届かなかった部分、子宮口まで肉先は達する。ズンツと腔奥を叩かれる感触に、葉月は「はああああ」と吐息を漏らした。

(な、なんだこれ？ ぜ、全然違う。睦月君のとまるで違う!!)

ピクンピクンツと腔中でペニスが震える。それが肉壁を刺激する感覚に、明らかな快楽を覚えてしまう。

(た、耐えろ！ こ、この程度耐えられるはずだろ!!)

先程、声に対して向けた強気の心が、挿入しただけで蕩けてしまいそうだった。必死に歯を食いしばり、覚えてしまう快楽を抑えようとする。

「よし！ よくできた。早速ご褒美だ!!」

刹那、その努力を嘲笑おうとするかのように男子生徒のペニスが膣中で膨張し——  
ぶびゅばつ！ どつびゅどつびゅどつびゅ、どびゆるるるるう！

「くひっ！ あ、い、いきなりで、射精てる！ な、膣中で、膣中でもう射精てるっ!!」  
膣中で射精が始まった。ドクドクと痙攣しながら、白濁液を流し込んでくる。

「——ひっ！ くっひっ！ あっあっあっ、あ、熱い!! こ、これ、な、膣中が熱い！ あ、  
や、嫌だ。こ、こんな——た、耐えないと、たえないとい、いけないのっにい」

胎内に広がる熱気。それが快樂に変換されていく。牡汁が全身に染み込んでくるかのよう  
うな気がした。

（駄目だ！ 耐えろ耐えろ耐えろ耐えろおおお!!）

パチッパチッと視界に火花が散る。痙攣する肉体。意志の力など無力だった。

「くるっ！ なにかくるっ！ くるうううっ!! あっあっ、あああ！ くっるう!!」

目の前が真っ白になる。身体中が痙攣し、震えた。反り返る背中。肉壁が収縮する。身  
体中から力が抜けていくのを感じた。

「あ……はへああああ……」

脱力感を覚えながら息を吐く。

「おいおい、イッたぞ。鏑木がイッた！」

この姿を見る男達は本当に嬉しそうだつた。



の圧力で溢れ出していった。

突き上げられるたび、ぶらぶらとネクタイが激しく揺れ動く。濃いめの陰毛が男の陰毛と絡み合い、引つ張られ、チクチクとした痛みが走る。が、肉体はその痛みさえも性感として認識し、より多量の愛液を分泌させた。身体中から汗が溢れ出し、甘ったるい発情臭が部屋全体に広がっていく。

「が、我慢なんかできないよ!」

若い学生にとつては刺激が強すぎる香りらしく、一人の男子生徒が葉月の背後に近づいてきた。そのまま肛門にペニスを押しつけてくる。

「あ、い、今は、今は駄目だ!!」

彼が何をしようとしているのかすぐに葉月は理解して止めようとするが、当然相手には届かない。

ずぐっ! みぢ、みぢみぢみぢみぢみぢいっ!

「おっ! ほおっ! おほおおおっ!」

膣を犯された状態でのアナルへの陵辱が始まった。

「だつめ、こ、こんなの、こ、壊れるっ! つ、潰れる! 私の身体が潰れるうっ!!」

ペニスで肉体を潰されてしまうのではないかと思うほどの圧力がかかる。尻孔が今にも裂けてしまうのではないかというほど押し広げられた。懇願は聞き入れられず、遂には根元まで肉棒が押し込まれる。ズンツと腸奥を突かれた。

「んひっ！ おっおっ、おっおっおっおっお!!!」

ぶびゃっ！ ぶしゅばああああああつ!!

途端に目の前が真っ白に染まる。全身から力が抜けていく。開く膀胱。気がつけば葉月は失禁していた。

「お、おじつご、おじつごでー！ いや、いやだあああ」

あまりにも無様すぎる姿。だというのに、肉体は心地よさを覚え、はへえつと表情はだらしなく弛緩する。

「おいおい、またイッたぞ！ 小便かけるなよ。きたねーから」

「ホント変態で淫乱だなあ。幻滅だよ」

笑い、蔑み、手を叩き、男達が囁し立ててくる。

「い、イッてな……い……わ、私はい、イッてなんか……」

首を振り否定するものの、小便を漏らしながら弛緩している姿では説得力などない。

「本当に頑固だなあ。まあいいよ。イッてないならそれで。認めるまでイかせ続けてやるからさ！」

ぐじゅずぼっ！

「おひっ！ う、動くなっ！ 動くなあああつ！ おっおっ、こ、壊れる。壊れるう!!」

膣と肛門——二つの穴を犯す二本の肉棒が動きだす。始まったピストンが、すぐに新たな愉悦を葉月の肢体に刻み込んできた。

じゅごつじゅごつじゅごつじゅごつ！

「とまれ！ 止まれえ！ とま、どまつでえ！ おかしくなる!! 私がおかしくなるからあ！ おつおつおつ!!」

肉と肉が擦れあう音と、葉月の嬌声が響き続ける。

「こんな大きいのも、こんな大きいチンポ知らない!! おつき、おつきすぎる！ だから、駄目だ。駄目なんだあ」

「睦月のよりでかくて気持ちいいから駄目なのか？」

「そうだ！ 睦月のより凄いいから、やめ、やめてくれえ！」

「睦月のよりでかいからイッたのか？」

「イッてない！ 私はイッてない！」

頭が朦朧とし、何を会話しているのか理解できない中でも、それだけは認めない。ジュッジュッジュッジュッと音を立てて上下に揺らされながらも、快楽を否定し続ける。

「頑固なヤツだ。そういう素直になれない女にはお仕置きだ！」

「お、いいね！」

二人の男が勃起した肉棒を眼前に突き付けて来たかと思うと、何の容赦もなしに二本の肉棒を口腔へと突き込んでくる。

「んぼっ！ おぼおおおつ！ うぶえっ、うげえええ」

二本のペニスを同時に啜えさせられた。今にも唇が裂けてしまうのではないかと思うく

らしいの圧力を感じる。詰まる息。自然と涙がこぼれ落ちた。

じゅごっじゅごっじゅごっじゅごっ！

「おごっ！ おっおっおっおっおほおおお！」

その状態で男達は腰を振り始める。ずぼっずぼっと突き込まれる肉槍によって、頬が内側からぼっこりと膨らんだ。まるで肉棒で歯磨きでもさせられているかのような状況。

（裂ける。口が裂ける!! お、大きくなってる。口の中でまだち、チンポがでかくなってる! だ、射精される。く、口の中に射精される!!）

血の気が引いたが、抵抗などできない。

「ああ射精るぞ！」

「俺もだ!!」

膣と尻を犯す男達もピストン速度を上げる。

ぶじゅごっぶじゅごっぶじゅごっぶじゅごっ！

「おぼっ！ んぼっ、おぶえええ！」

（くる！ また来る!! 耐えられない。来てしまうっ!）

肉の海に溺れてしまいそうだった。再び強烈な快感が身体の奥底から増幅し――

ぶびゅぼっ！ どびゅぶるるるるるっ！

「んぶええあああ！ お、おぼ、おぼれっる！ お、くっる！ ぐるぐるぐる、くっる！

おほおおお!!」



男達の射精と共にそれが爆ぜた。

口腔、アナル、ヴァギナ——穴という穴が白濁液に満たされていく。思考はドロドロに蕩け、グルンツと瞳は白目を剥いた。

「うぶえ、おええええええ」

肉棒が口腔から引き抜かれた途端、精液を逆流させて吐き出す。口を開いて舌を突き出し、白濁液を零す最高に情けない姿を葉月は晒した。

「また盛大にイッたなあ」

「い、いっでない……わ、わだじは……い、いっでない……」

それでも絶頂を否定する葉月だったが、どこまで自分の意識を保っていたのだろうか？

\*

「は、はへ……い、いっでない……わだじは……いっでない……」

それからどれだけの時間犯され尽くしただろうか。

男子生徒達が飽きて帰った頃には、窓の外に見える空はすっかり暗くなっていた。

葉月は全身を精液でコーティングされたのではないかと思えるくらいに、身体中汁塗れになっている。尻だけを突き出した状態で脚を蟹股に開き、上半身は床に密着させた状態でひくひくと震え続けていた。

開きっぱなしの膣口と、尻穴からも止めどなく愛液が溢れ出し続けている。そんな状態で讒言うわごとのように「イッてない……イッてない……」と何度も繰り返していた。

「ごめん……僕の……僕のせいだ……ごめん。ごめんなさい……」

穢されきつた葉月に対し、椅子に拘束された浩太が泣きじゃくりながら何度も謝罪して  
くる。もともと汚い顔が、更にぐしゃぐしゃになっていた。

（だ、めだ……わ、私は守る人間だろ……）

その声を聞く葉月は、ゆっくりと顔を白濁液に塗れた顔を上げる。ハアハアと荒い息を  
吐きながら、口を開く。

「……あ、謝る必要なんかない……こ、これが私の仕事だ……」

人を守る。その為だけに生きてきたのだ。

「でも、でも……」

浩太の涙は止まらない。

その彼を葉月は安心させるように、力なくはあるけれど握り拳を作ってみせた。

「大丈夫。私は大丈夫だ……」

笑う葉月の瞳は、言葉を裏付けるように未だ死んでいない。強い意志の光を宿していた。  
（この代償……高くつくぞ……）

肉体は穢れながらも、退魔師の誇りは未だ健在だった。

「へ……あ、ああああ……」

彼らの声が、葉月の心を正気へと戻していった。

「あ……い、いや……イヤ……い、嫌だ。み、見るな……見るなああああつ！」

自分がしでかしてしまったことの重大さに気付く。見られてはいけない。こんなものを晒してはいけない。心が悲鳴を上げる。慌てたように葉月は両手を広げると、自らが排泄した蟲を手で囲み、衆目の目から隠そうとした。

「ひい、見ないで！ 見ないでえっ!!」

見るな見るなと繰り返し、蠢き、広がる蟲を集め、隠す。今更隠そうなどとまったく無意味な行動だったが、混乱した状況では正常な判断など下すことができなかつた。

蟲の上に覆い被さり、身体を丸めて震える。

「ひぎっ！ あ、な、なに？ あっあっあつ、な、なにこれえ!？」

変化が起きたのはその時だった。

「ひっ！ む、蟲が胸につ!!」

身体の下に隠した蟲たちが、制服の中に侵入してくる。下着をずらし、乳房を剥き出しにしてきたかと思うと、柔肉に吸い付いてきた。蟲の頭部分が花弁のように開き、そこにびっしりと生えた小さな針のようなものが乳房に突き刺さる。チクツとした痛みが走る。

次の瞬間――

「あ、な、なに？ な、ながれってくる！ あっあっあつ、な、なにかが流れてくるう!!」

し、痺れる。胸が痺れるうっ！」

針を通して蟲の身体から温かな何かが乳房の中に流れ込んできた。しかも蟲の数は当然一匹ではない。数十匹の蟲が一斉に流し込んでくる。

「あ、く、くるしっ！ あっあっあっ！ え、あ、う、嘘ッ！ こんなのもって、嘘だ。嘘だあああ!!」

注入に合わせて肉体が変化する。明らかに乳房が大きくなっていった。元のサイズはちょうど掌から少し零れるくらいなものだったが、自分の下腹部が見えなくなるくらい胸が巨大化する。制服が今にも破れそうなくらいに引つ張られた。異常なサイズである。

「な……にこ、れ……はひーはひーはひーはひー……あ、ああ……は、破裂する。む、胸が破裂するう……」

ぱんぱんに膨れあがる乳房。内部から感じるのは激しい圧迫感だった。空気を過剰に注ぎ込まれ、今にも破裂してしまいそうな風船にも似た状況である。

ぼろぼろと落ちていく蟲。乳房へ「ナニカ」を注入し終えた彼らの役目はもう終わりらしく、そのまま動かなくなつた。

「ど、どうなってるんだあれ？」

膨れあがる乳房。普段からは想像もできない痴態を晒す姿。あまりに異常な光景に、生徒達も混乱する。

「……どうだったかなみんな。余興は楽しめたかな？」

ここで水城がステージに上がった。

「お、おま……え……わ、私に、な、何をしたあ……」

身動きが取れないままに、必死に問う。

「さて、ここで俺が出てきたことで察した生徒もいるかも知れないが、これは俺がやったことだ。俺が鎬木さんの肉体を改造した」

しかし、水城は問いかけに答えることなく、生徒達へと語りかける。

「俺がやった？」

「どういうこと？ 水城先生がなんで……」

「っていうか、どうやればあんなことが？」

ざわつく生徒達。

「どういうことという理由は簡単だ。俺が楽しむ為だよ。いいかい、そしてこれから君達には俺を楽しませてもらいたい」

語りながらパチンツと保健医は指を鳴らす。するとこれに合わせるようにいくつもの方が体育館内に出現し、その中から醜悪な妖魔たちが姿を現した。

「ひっ！ ひいいいっ！」

「きゃあああああ!!」

異常事態に生徒達が悲鳴を上げる。

「こういうわけで俺には特別な力があるんだ。いいか、俺に逆らうなよ。今から俺の命令

を聞くんだ。その通りにすれば、君達の安全は保証してあげよう」

この瞬間、水城は完全にこの場を支配した。

\*

「ふひっ！ で、でるっ！ そんなに搾られたら出るうっ!!」

びゅっびゅっつびゅばああああああっ！

触手によって両手両足を縛られ、天井からぶら下げられた葉月の醜悪なまでに膨れあがった乳房を、涙を流して「ごめんなさい。ごめんなさい」と繰り返す女子生徒が何度も揉む。行われる搾乳行為により、肉棒ほどの大きさに膨れあがった勃起乳首からは、まるで射精でもするかのように多量の母乳が噴出した。噴出した母乳は、真下に置かれたバケツの中に溜められる。既にバケツの中には白い液体でなみなみと満たされていた。

「いぐっ！ いぐうううっ!!」

射乳と同時に散々肉体に刻まれた絶頂感が再び身を襲う。

「はへ……はへええええ……」

またも弛緩する身体。乳首が繰り返し痙攣する。瞳は白目を剥き、ビュッビュッと愛液まで飛び散った。

このまま眠りについてしまいたい。この心地よさの中で意識を手放せればどれだけ幸せだろうかと思う。が、それは決して許されない行為だった。

「すいません」

新たな生徒が後ろから近づき、再び乳房に手をかける。

「むひいっ！」

再び性感が身を襲った。

生徒達の手で膨張した葉月の胸を搾れ——それが水城の下した命令である。この命に逆らえる者はいない。生徒達は謝罪の言葉を吐きながらも、容赦なく葉月の胸を搾ってきた。ぎゅっぎゅっぎゅっつと手を使い、まるで牛から搾るように胸に刺激を与えてくる。

「や、やめっで、も、もうやめでくれえ！ おかしく、おかしくなるんだ。これ以上されたら私が壊れるっ」

全校生徒数はおよそ七百名。それら全生徒が搾乳を終えるまで行為は終わらない。今のところ胸を搾った人数は十人ちよつと。それだけでも理性がドロドロに溶かされてしまうのではないかというくらいに愉悅を与えられていた。

乳房に触れられ、搾られるたびに覚える快感に「ふひっ！ ふひいい」と嬌声を上げてしまう。生徒達の体温を肌を感じるだけで、肉体はビクビクと震えた。

「ゆ、ゆるひて、ゆるひてくれえ」

自分が自分でなくなってしまうかも知れない——本能的な恐怖を覚え、許しを乞うてしまいが、生徒達の意味ではどうにもならない。

「ごめんなさい」

返ってくるのは謝罪だけだった。







この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!





# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>



<http://www.cran-berry.com/>



<http://www.mille-feuille.jp/>



<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!